２０１８年度始業式メッセージ

2018.04.09

皆さん、お早うございます。改めて新入生の皆さん、心から歓迎します。新入生の諸君には、７日の入学式の式辞で、毎年同じことを言っているのですが、「選択が正解だったかどうかより、選択を正解にすることが大事」、「高校３年間（１０００日）は『マジックアワー』、精一杯、輝こう！」、「そのためにも『誰かのために』とか『仲間のために』という『こころざし』を育んで欲しい」と話しました。

２・３年生諸君には、３月の終業式で、私自身の小学校の時の教育実習生の先生の思い出（田植えの日、あこがれの教育実習生の先生に泥まみれの父母を会わせたくないと思った・・・）や大学生の時の国道掃除のアルバイトの思い出を話しました。また、少し前ですが、バスの運転手さんに、客である私たちが何故「お礼」を言うのかについて話しましたね。運転手さんが単に給料のためだけに仕事をしておられるのなら、お礼を言う必要はないかもしれません。しかしほとんどの運転手さんは「公共交通機関」の運転手としての使命感をお持ちです。例えば高校生を学校へ安全に輸送することは、皆さんの学びを支援することになるのです。そうだとしたら、私たちがお礼を言うのは当然です。

何のために学ぶか？働くか？について皆さんも考えて欲しいと思います。きちんと『カセギ』（経済的自立）、『ツトメ』（社会参画や社会貢献）を果たしてこそ一人前の大人といえます。本校卒業生には、どんな職業でもいい、尊い生き方をして欲しいと願っています。

「職業」「生き方」と言えば、この春休み、少し疲れ気味だったので、難しい本はなかなか読めず、時代小説（娯楽小説？）を一冊だけ読みました。図書館の太田先生は「今の高校生は時代小説をなかなか読まない」とおっしゃっていましたが、皆さんはどうでしょうか。同志社大学の浜島幸司先生はある雑誌で、「読書時間『０』の学生が５３％」という調査結果を照会し、「大学に入ってからの勉学には高校までの読書習慣が少なからず影響している」と強調されています。読書は大切です。

話を戻します。読んだ本は山本一力「べんけい飛脚」。江戸時代の飛脚の話です。労働を通して得られる喜び、額に汗して働く人間の最も美しい姿を描いています。考えてみれば多くの小説やドラマのテーマは、共通して、それなのかもしれません。

先日、亡くなられた高畑勲さん（宮崎駿さんとタッグ（ジブリ）を組み、たくさんの名作を残された方ですね）は、戦争中、岡山空襲に遭遇され、それをモチーフに「火垂るの墓」などの作品に取り組まれました。最後に彼の言葉を紹介します。求められる働く姿勢だけでなく、本学園の宗教教育の意味についてもヒントを与えてくれます。

「私たちは先だった人たちに見つめられているのだという感覚を持つことが必要ではないか」